

戰捷紀念

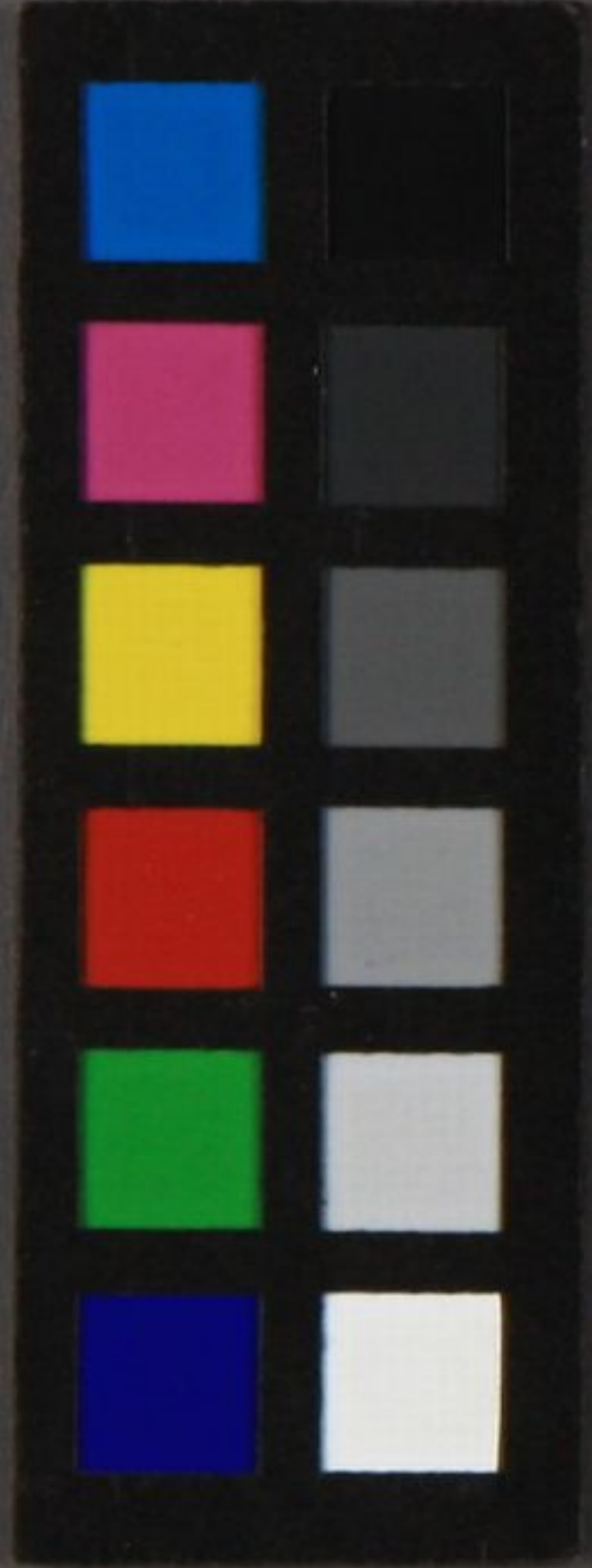
劍影

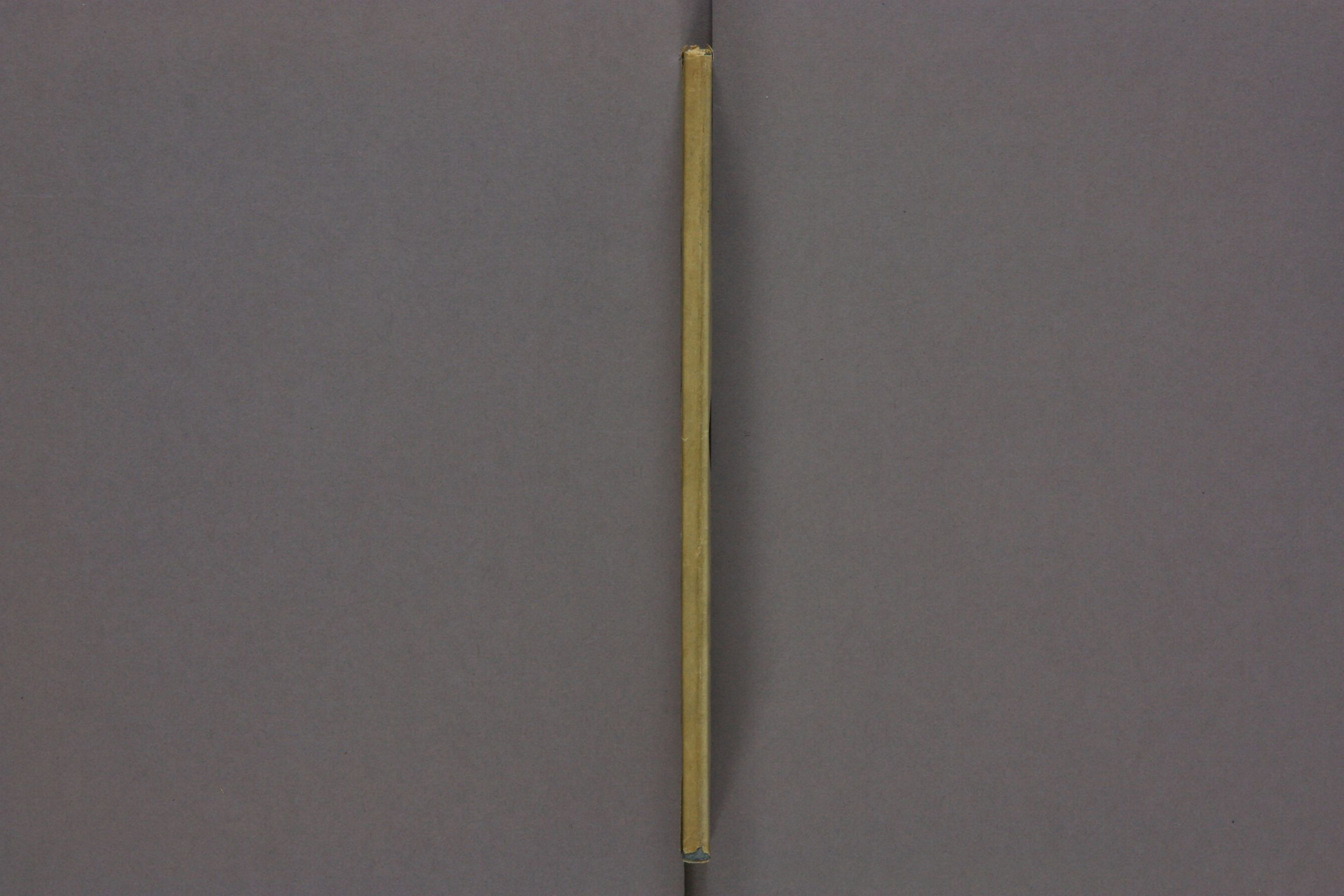
渡邊國武先生題辭
小笠原海軍中佐序歌
河井醉茗君著

平福百穗君畫
戰捷紀念繪端書
插入

東京

金色社發行





金 色 社 編 纂

小 說 集

掬 汀 子

近 刊

鐫 木 清 方 氏 畫

◎ 洋 裝 最 美 本
紙 數 四 百 頁
定 價 郵 稅 未 定

其着想の健全にして深刻なる、其行文の純清にして詩趣饒かなる田口掬汀子の如きは現代稀に見る處なり。本社は爰に江湖讀書子の希待を満足せしめんため、氏が既往數年間に物せられたる長短數種の小説を請ひ受け『掬汀子』と題して發行せんとす

輯むるところの長篇『三晝夜』の情趣に富める、『極樂村』の穩雅平安なる、『歸省夫人』の深刻なる、『反抗』の熱烈奔放なる其他數種の長短各篇何れとして作者獨得の趣味を發揮せざるはなし。文藝を愛するもの、習文に志あるものは必ず一本を備へて永久の伴侶となさざる可からず

纂編社色金

集説小

掬汀子

刊近

鐮木清方氏畫

洋裝最本
紙數四百頁
定價郵稅未定

其着想の健全にして深刻なる、其行文の純清にして詩趣饒かなる田口掬汀子の如きは現代稀に見る處なり。本社は爰に江湖讀書子の希待を満足せしめんため、氏が既往數年間に物せられたる長短數種の小説を請ひ受け「掬汀子」と題して發行せんとす

輯むるところの長篇『二晝夜』の情趣に富める、『極樂村』の穩雅平安なる、『歸省夫人』の深刻なる、『反抗』の熱烈奔放なる其他數種の長短各篇何れとして作者獨得の趣味を發揮せざるはなし。文藝を愛するもの、習文に志あるものは必ず一本を備へて永久の伴侶となさざる可からず

戰捷紀念

劍影

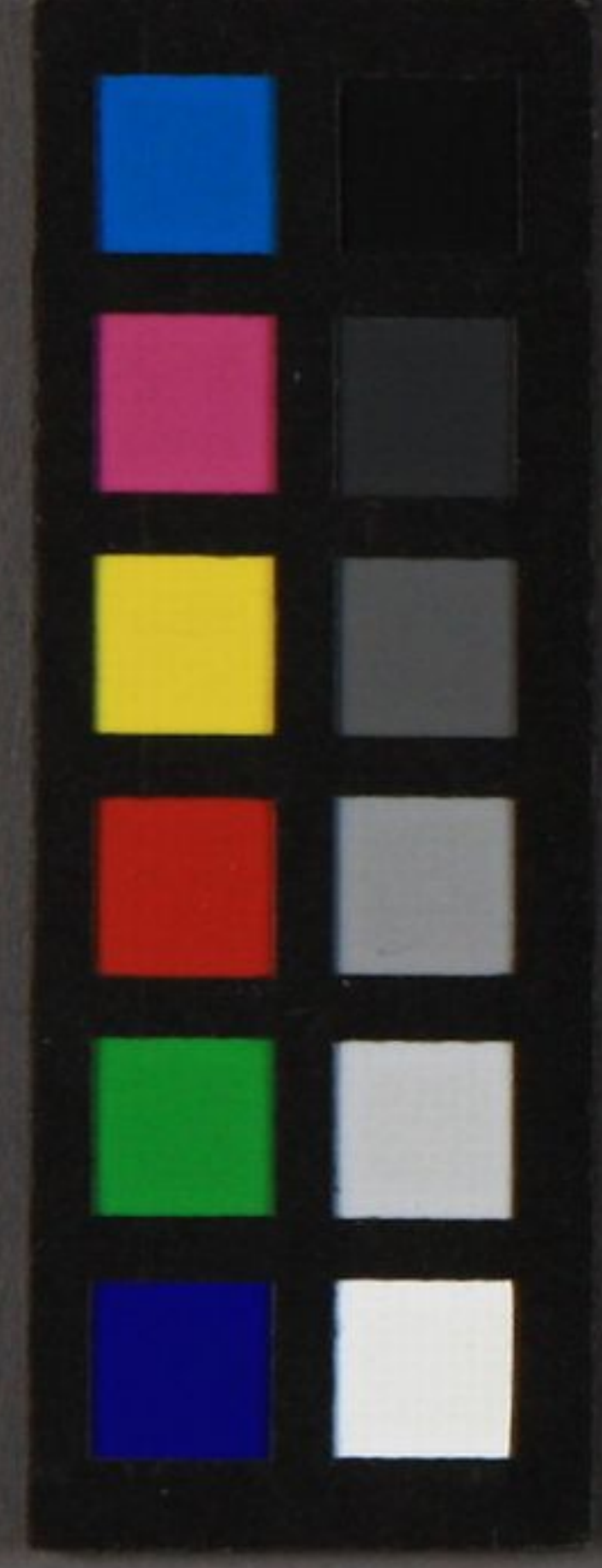
渡邊國武先生題辭
小笠原海軍中佐序歌
河井醉茗君著

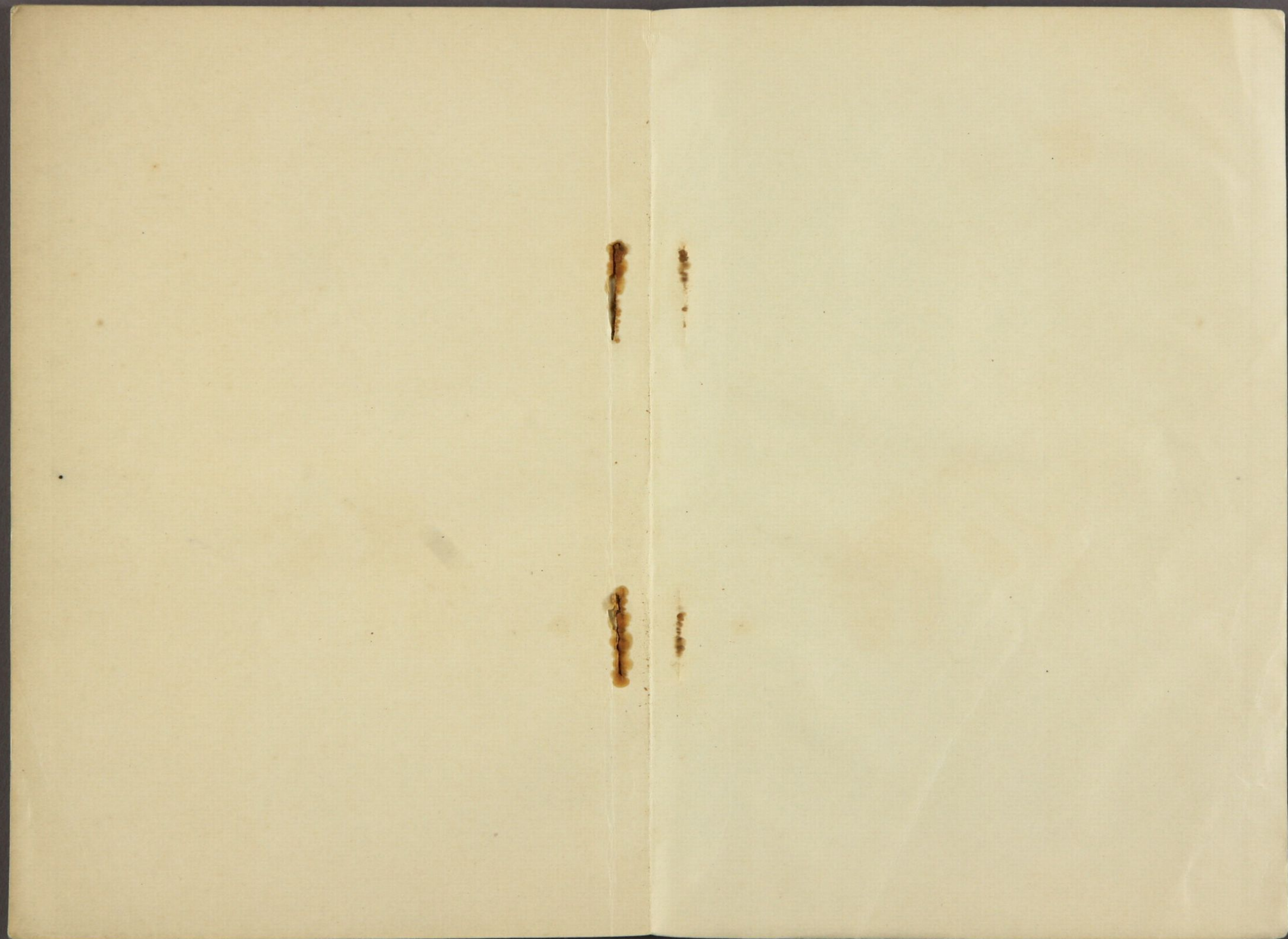
平福百穂君畫
戰捷紀念繪端書
挿入

東京
行發社色金

イセノ九ノ三十ノワ
ルワ

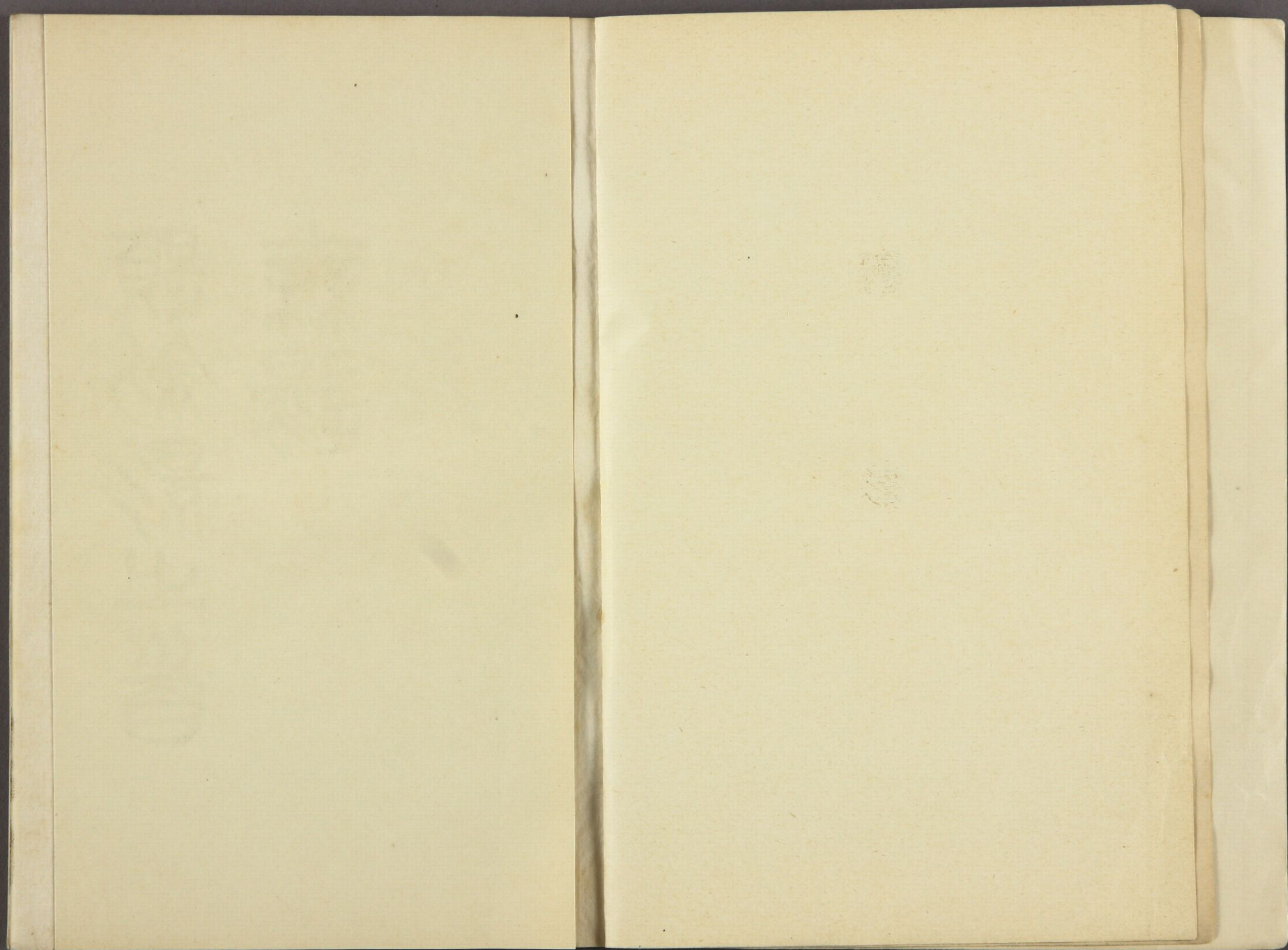






劍

影



題劍影千卷

錦鐵
心骨

鐵骨
錦心

題劍影生書

鐵骨
錦心

題劍影生書

森錫



くさくさ

待てどかた

待てどかた

待てどかた

君のハカウカ歌

長生

くわん

法心

心

満之

君のたか歌

長生

初めに

平和を愛する我れ、今茲に戦ひを歌ふ、此
は美しくしき星の下輝ける名を残しつつ散り
行く戦場の花を愛惜し嘆美すればなる。
嗟、我れ、戦ひを聞くがごと血汐の波は強
けれど、歌ふて聲の小ささを愧づ。

明治天皇卅八年春

電報新聞社樓上にて

醉茗生

目次

紀元節	一
露國公使を送る	四
瑞雲	六
古戰場	一〇
九連城の役	一三
遼陽の決戦	一六
戦後	一九
芙蓉	二二
娘樂隊	二五
日進春日	二八

劍影

燈臺守	三〇
水兵	三二
異調	三五
餘韻	三八
血書	四〇
柩の落花	四三
めぐり合ひ	四五
春は陸より	六二
軍使	六四
旅順陥落	六七
萬歳男	七〇
天長節	七五

紀元節

河井醉茗

かへりみすれば今日を去る
 二千五百六十四年
 我日の御子は日の本の
 國を創めて建てましぬ

靈光、天の雲に照り
皇徳、地の隈に凝る
今日の佳節にふさはしき
旅順港外、第一の
快戦ありと傳へらる

暴國、懲せの詔勅
一度び民に布くところ
錦旗、大城にひらめいて
光輝、四海の雲を射る

北方、千島に羽根をのし
西、韓山に爪をかけ
日の本狙ふ荒鷲を
天に代はりて討たずんば
國の平和は保たれず

やがて凱歌いさましく
海より陸より響かなん
吉兆靈なる今日の日を
歡、極つて泣き祝へ

露國公使を送る

公使こうしローゼン旗はたを巻まき
旅行りょぎの用意よういもそこそこに
公使館こうしぐわんをばひきはらひ
彼かれ、本國ほんごくに去さらんとす

君きみし、平和へいわをくりかへし

我われも、平和へいわは望のぞみしを
極東きょくとう總督そうとく、非望ひぼうあり
心こころづくしも今いまや仇あだ

砲火ほうくわさかんに相見あひまえ
國くにと國くにとは戰たたかへり
術じゆつなく旗はたを巻まき去さるも
公使こうしもとより咎とがあらず

公使こうし送おくるも、戦たたかふも
皆みな、公法こうぼうの上うへに立たつ
文明ぶんめい國こくを忘わすれず
去されや船路ふねぢを恙つひなう

瑞雲

初はつめ畝うねより起おこしたる
黒土くろつちの香かは胸むねに泌しみ
夏なつより秋あきの鍬くわの柄えに
汗あせと力ちからはこもりけり

農夫のうふ、豊饒みのりの野のらに出いて
強つよき昨日きのふの勞働ろうどうを
うち忘わすられて大空おほぞらの
光ひかりゆたかに仰あやくなる

一人ひとり持もちたる我男兒わがそのこ
斯このみいくさに召集めされしが
舟路ふねぢの際きばに音信たよりあり
生きては歸かへり候さよらはず

人を害ひ、地を盗み
飽くことしらぬ貪慾の
暴國露西亞も懾服し
斯のみいくさの静まらば

百萬餘噸に浪を蹴り
貢物の數をもたらしつ
再び砲筒は向けまじと
平和の約や結ばなん

我兒一人の生命にて
みいくさ捷つとは想はねど
仰げば高さ秋雲の
五彩榮えたる望かな

美し國原、瑞ありて
野に千垂穂の露はたる
遠きみいくさ兵者の
劍の尖に任せたり

古戰場

風は颯颯、草茫茫々
韓山荒れて路遠く
行きに行き行く軍隊の
肅、肅、肅と野をたどる

流沙一條水涸れて

廢墳寒く異禽鳴く
隊長、いとど行きがてに
駒のあがきのゆるむなる

十歳の夢は眼の前に
血汐の跡を越えくれば
萬骨枯れし古戰場
山河憂ひの色を帯ぶ

鞘さやに藏かくめし劍つるぎをば
再またび拔ぬきし今日けふにして
忠魂ちゆうこん未いまだ冥めいせずば
今いまはも安やすく地ちに歸かへれ

君等きみらが血ちもて贖あがなひし
平和へいわを反は古こと破やぶりたる
敵てき、懲こらすべく百萬まんの
王師わうしは茲こゝに動うごきたり

風かぜは颯さつ々く、草くさ茫ぼう々く

韓山かんざん荒あれて路みち遠とほし
進すめ兵者つはもの後のちれたり
山やまに春はるく、夕日ゆふひ影かげ

九連城の役

水みづはたつまく鴨綠江あうりよくこう
森もりはとどろく長白山ちやうはくざん
大風たいふう起おこり、空野くうや鳴なり
十萬じゅうまんの軍ぐん、血ちに狂くるふ

驚天石破す、將軍の
兵を行ること神か鬼か
精兵、先登を争うて
慕然、迫る敵の陣

コサツク騎兵、狙撃兵
護る天嶮こごしくも
地の利を占めて堀うがち
壘寨固く築さしが

兵氣爛爛火の如く
ふるる物みなふり拂ふ
日本軍の呐喊に
白旗立てなん外はなし

はたして五月一日の
戦鬪、あつばれ勝鬪の
九連城にひびくとき
きたなし、敵人皆逃げつ

江を渡りて滿洲の
第一城を落したる
我軍勢は長驅して
敵都衝んづ勢なり

遼陽の決戦

夜襲、強襲、遼陽の

兩軍兵馬、五十萬
荒野動亂、滿天の
星花碎けて土に落つ

將軍、駒を空に蹴り
軍隊、風の飛ぶがごと
山河草木血を帯びて
生命の際の関を揚ぐ

河流を亂す太子河
北、奉天に引上る
敵の敗兵歴歴と
九月四日の明渡る

必勝、必勝、必勝を
期せし野戦に大敗し
地圖を疊みて敵帥の
汽車は停まる地を知らず

歸れ、歸れ、スラブの兒

汝の劍は長かるも
汝の砲は堅かるも
極東更に強者あり

戦 後

戦争はてたる荒野原
夕の雲の低う垂れ
小草、血に染み、肉に塗み
生きたる色をば失へり

駒の嘶聲、関の聲
地雷天雷收まりつ
人馬の屍かさなりて
残んの呼吸の微かなる

砲車は碎け、劍は折れ
土に流れる血の川に
今か銃劍交へてし
彼もうつぶし、我もふす

見よ、見よ、星の白きより
光射すよと覺えしが
小山の蔭の夕もやに
白衣の御神降り立てり

トロイの兒等が血を繼けて
野に禍の痕絶えぬ
戦の犠牲よ疾くさめて
御空の園に復活れ

犠牲のことごとく夕もやの
御神の裾に覆はれぬ
梢に凝つて地に落つる
露のささやき静なり

芙蓉

國と國との戦争に

人の兒なんの罪かある
くろがねならぬ兵者の
深傷負ひしがいたましき

勝鬨高くあがれども
神の賜ひし熱き血を
草木も生えぬ野に注ぎ
歩めば呼吸の絶え絶えに

寐床の上にはこばれて
うつつなき身の猶絶えず
進めを歌ふ兵者の
精神を君し慰めよ

秋空清き君が手に
水や灌げる紅白の
芙蓉の花をとりまぜて
かの枕べに贈らずや

なやめる者の慰藉に

神は自然を與へたり
深傷を負ひし兵者を
花の薫につつまずや

娘 樂 隊

道をねりくる一列の
樂手いづれも童女にて
調やさしく聲きよく
樂の起るや旗のかげ
小波のうねり寄すがごと

出征なせる武夫の
留守をしまもり妻よ兒よ
家は名譽をさざみしが
軒端の蕊さびしげに
人は歸らずなりにけり

愁ふる人を慰めの
天地にこもる誠心は

自然の調にうちつれつ
くはし童女の口づから
戦死の光榮を歌ふなる

童女の聲は眞清水の
砂の底に泌むがごと
名譽の響傳ふれば
歸らずなりし武夫の
家のくもりの晴れにけり

日進春日

日本海の海上に
二つの城は成り出でぬ
くろがね堅く身によそひ
日進春日の名もよしや
雲騒がしう浪荒るる

太和島根を護るべく
北斗の光にらまへて
二個の猛者は嘯けり

武者振はしき初陣を
潮路はるばる送り來し
同盟國の大丈夫等
我が歓迎の御酒ぞ把れ

燈臺守

銀河横ふ荒海に
探海燈の光を見
今朝朝風の沖遠く
雲は断れて烟見ゆ

さてこそ敵の軍艦の

近く寄すると覺えたり
木葉微塵に碎かれて
藻屑となるは今のうち

對馬の濱にそばだてる
燈臺守る我が勤務
怪き船をみはりして
險うつまもみがさず

霧笛吹いて我船に
海危うしと告ぐるをり
砲聲既に轟いて
敵艦あはや沈むなり

水兵

神の御力凝り成りて
花うるはしう鳥うたふ
御國めぐらす蒼海の
波濤は我等が呼吸なり

御國めぐらす蒼海を
軍艦つらねてのりまはし
檣にひらめく日の丸を
生命と仰ぐ水兵等

顔くろめし日の色は
暑さ寒さの潮を越え
嵐に向かひ霧に立ち
波に強さを現はせり

募るとあらば悉く
決死の群にもれめやも
行けと聞く間のもどかしさ
死地に入る間の力なさ

雲は見ゆれど浪のはて
いづこの山にかかるらん
水禽ねむる海原の
浪の上にはてん水兵等

異調

古書に言ふ、玄海灘の一孤島、沖の御前には樂器を惜む神を祀れり、人其由來を知らずと、我常陸丸佐渡丸二船が敵艦隊に出遇ひて撃沈されたるは蓋し此島に近し、詩あり。

壹岐に對馬に程近き
沖の御前に龍卷の
海の嵐は襲ひ來て
雨脚早し、霧深し

人住むことの許されて
誰が崇しか不知火の
樂器を惜む神ありと
昔時よりぞ言傳ふ

磯うつ浪のゆるやかに
幾千萬年を眠りさし
沖津島根の碎けよと
今朝はも轟轟しき

樂器を惜む神ませば
恐れあるべきとどろきの
いよよ烈しくなりまさり
木さへ草さへ悸けり

ああ何者ぞ神島の
自然の調を紊すなる
神代以來いかめしき
歴史のゆるる玄海に

餘韻

三笠艦上の軍樂隊を悼む

手なれる笛に傳ふべく
呼吸あたたかに貯へし
胸の調は冷えさりて
哀れ樂手の腕萎えつ

アートの上の美をば守る
君し戦争の人ならず
さあれ戦争の艦の上
彈丸怖るるは耻辱なり

咄、咄、彈丸は美しいの
物の響を奪ひたり
ああ斷れにし絃ついで
誰歎奏でん哀の譜を

血書

剪頭第一、血書を捧げて旅順閉塞決死
隊に加入せる兵曹林紋平君を嘆美す。

身を海軍に置くからは
かかる壯舉に加はらで
勇烈無双いつの日か
死處を得るべき機會やある

二度三度名のり出で
行かんと言ふに許されず
隊長我れをうとみてや
など赤心の汲まれざる

一兵曹と言はば言へ
軍人たる身の魂は
奪ふべからじ消しがたし
決然、死地に赴かむ

要こそあれと抜くナイフ
指に觸るるや潮時の
鮮血紙にほとばしり
見る見る花とあらはるる

有馬中佐は捧げ來し
血書をながめ一言葉
許すとばかりうちまもる

感きはまつて紋平の
涙は襟にあふれたり

柩の落花

廣瀬中佐の靈を送る

軍の神と仰がれて
今日青山に祀らるる
中佐の柩寂として
見送る人に櫻散る

三たび部下をば求むべく
敵弾注ぐ舷上に
かへり見なせし面影を
瞼ふたぎてしのぶかな

戦史の上に歌あらば
始終を全ふして
勇と愛とを併せたる
君が名とはに歌はれむ

都の空の薄曇
櫻吹雪ははらはらと
柩をたたく春の風
夕雲遠く愁ひ立つ

めぐり合ひ

哀の樂譜は春花の
一風ごとに散るに似て
千尋の海の底深く
響さびしう傳へ來る

鬼と呼ばれて軍艦に
在りし昨日にくらぶれば
鱧の狭物の悠悠と
あたりのどけき住居かも

そも訝かしさ物の音の
あはただしげに聞ゆるは
戦争またも始まりし
血をどる、血をどる
否、否
眠るべし、眠るべし

客
城と恃める軍艦も
敵なきうちの生命にて
終焉の樂のはてるまも
待たで潮はひたしけり

砂上しゃじょうに建たちし樓臺ろうたいの
一ひとゆりゆるる大浪おほなみに
崩くづるる如ごとく敵てき人の
水雷すらい一度ひとたび飛ひ來らいせば
將しょうの勇圖ゆうとも鐵艦てつかんも
あはれ水泡みわの夢ゆめと知しれ

さても清きよらの住居すまひして
安やすく眠ねむるは何人なんびとぞや

主しゅ 神聖しんせい無垢むくの水城すゐじやうに
けがれし聲こゑの近ちかさて
我われを醒さすは蠱物まじものの
惡戲いたづらなすと覺おぼえたり

客きやく 主人しゅじんよ、猶なほも夢見ゆめみるか
蠱物まじものならず、變化へんけならず
かく言いふ我われは人間にんげんの
將しょうと呼よばれし強者つよものなり

主 物のものしの言條や

いで一刀に斬りさげて

神聖無垢の水城に

衰はあらせじ、覺悟ひろげよ

客 我れ人の世の戦鬪を

ひたすら忌みて來りしを

かかるのどけき住居にて

あらがふ事は好まざり

主 顔たくみに軟らげつ

語たくみにあやつりつ

誑かさんとや、おぞの奴

問答無益、立上れよ

客 あな詮もない血氣男に

なかなか出遇ひ候よ

ゆめ争ひは好まねど

向へとあらば、向ふべし

主「面を上げよ」

客「後るべき」

主「や、や、や、何物の

悪戯なすと覚えしを

珍しし、マカロフ將軍

客「しか言はるるは一昔

我都にて記憶ある

廣瀬少佐にあらざるか

主「さなり、將軍なんとして

此の水城には來給ひし

心もとなし、心もとなし

客「言ふもなかなか面羞し

言はぬも人に心なし

茲に悔しき運命の

敗戦やぶれいくさのひと一くだり
物語ものがたらんに先まづ先まづ君きみ
胸むねくつろげて聞き給たまはれ

主ま敗戦はいせんとは

客きやくさればなり

主まさて其その後ごは

客きやく兵氣へいきはげみて兎ともすれば
錨いかりあぐるにたゆたふる
港みなとの負傷艦おひび勵ほましつ

進すすんで敵艦てきかんむかへんと
大艦たいかん、小艦せうかん、驅逐艦くじくかん
港口こうぐち出いでて勢揃せいぞろへ

しばらく砲火ぱうくわを交まじへしが
空切そらきる彈丸だまの風かぜにだに
薙なぎ倒たよさるるばかりにて
浮足うきあしたつたる艦隊かんたいの
引返ひきかへさんづと不甲斐ふがひなや
水先みづさきかはる折をりこそあれ

渦捲く浪は千尋の
底を翻して空を衝き
天柱折るる聲の中
城と恃める我旗艦
數千の生靈もろともに
波間に沈めし刹那の感

吹くや颯風の一息に
木葉ちりぢり舞ふがごと
あな怖ろしき運命の

此處にめぐりつ戦争の
敗れの贄と置かれてし
我等過世に咎やはある

かねて究めし戦術も
戦ふべきに戦はん
將の用意に外ならず
戦ふべくもあらざるに
嬖臣大事をあやまりて
國の破滅を醸せるを

力の限争ひし
 苦言は遂につらぬかず
 生きて武運の衰を
 待たんよりはと潔よく
 死出の出陣はやめたる
 此胸をしも汲み給へ

主
 兵馬に生くる軍人の
 慰藉は即ち戦死なり
 生きて砲火に相見え

死して眠を同ふす
 昨日の敵は今日の友
 友よ、潮の杯酌まむ

客
 おお運命を共にせし
 我が水兵よ、歌あらん

水兵
 波間の上は騒げども
 波間の底は静なり
 争ひ多き陸の兒の
 かかる幸はも知らざらめ

天使

つとめはてたる將軍に
神の十字架つたふなり
今こそ將よ、大なる
神のみむねに眠るべし

皇祖

國の御坐に鎮まれる
遠つ御祖の血を繼けて
日本男心傳へきし

少佐よ、國の座になほれ

ああすがすがし

神の兒の

夢をし護り

あたたかに

常世の國の

平らけく

春の潮の

湧いて出づらん

春は陸より

もとより海を家として
舷側たたく浪音に
ゆりおこさるるあかとき
の
残んの夢に星ながる

今朝さる船のもたらせし

國の消息のこまごまと
卷き封じたる梅の花
春は陸より傳はれり

敵壘未だ落ちねども
旅順の封鎖いとかたく
やがて勢力竭きはてて
白旗かかげん折こそは

颯さツと端艇ポトを漕こぎよせつ
一步いほを陸くわにうつす時とき
ああ我胸わがむねは土つちにふれ
波濤はとうの如ごとくゆらぐらん

軍使

雲霧うんむ十字じにきりはらふ
名劍めいけんありとも十重とへ二十重にたへ
包圍かこみは解とけず旅順口りょじゆんこう
鳩はとの使つかひも絶たえつらん

攻せむれば落おつる命めいなれど
我將愛わがしやうあいを重おもんじて
降くだるとあらば許ゆるさんと
封書ふうしよの文字もじは輕かろからず

軍使ぐんし肅肅しゆくしゆく旗はたをたて
樂がくを背後うしろに従したがへて
直たぢにくぐる檻をりの口くち
やちもて敵てきの陣じんに入る

手をあぐるにも過たば
生擒らるるか、刺さるるか
名譽か、耻辱か、全軍の
使命は肩にあまりあり

降るもよしや降らぬも
成るも成らぬも天にあり
軍使肅肅旗をたて
顧みせずかへりみに歸り來る

旅順陥落

さすがの敵も舌まさし
我軍勢の勇猛に
難攻不落をほこりたる
旅順も遂に保たれず

敵、九天に窺へば
我は、九地の底潜る
砲彈、空を縦に斬り
坑道、巖を横に抜く

一砲臺を落すため
血汐は川と流れたり
五萬の犠牲を顧みず
陥落せし名譽の旅順港

我手に入りし旅順港
要害自然の巖だたみ
巖に立てる燈臺は
永劫我れの光なり

黄金山の天邊に
登る朝日の御旗かけ
ほだしはきれつ數萬の
忠魂今かよみかへる

萬歲男

ああら目出度や、欣ばし
戦争は勝つて候よ
旅順は落つて候よ
我は都の片田舎
日に日に千駄の茅萱刈る
萱にまみれし賤なるが
都の兒等と萬歳を

群れ唱ふるも興あれや

國旗、世界旗、大小旗
旅順陥落祝捷旗
風は勇んで鳴りわたり
御濠の水の蒼蒼と
うつる雲井や春はれて
欣び歌ふ群集の
調に開く九重の
千代田の宮の梅白し

皇徳靈にましましてば
萬民子來、皇軍の
行きのまにまに、たまきはる
生命なげんと競ふかな

天つ日の
射照らす極み
大君に
なびかぬ國は
あらじとぞ思へ

や、參るべい、提灯の
燈火揃ふたか、鴨の首
揃た、揃たと、萬歳男
狂ひ走りに濠つづき
櫻田門をば出でて行け

花火、花瓦斯、電氣燈
雪洞、カンテラ、炬火の
うづみし都、照る薨

天の河原の天人達も
煙に御貌や染まるらん

君の戦に

男をやつて

代へてもナ

戀に代へても

わしや惜しくない

賤のてにをは係はあれど

あとの結がそらどける
ああら目出度や、欣ばし
戦争は勝つて候よ
旅順は落つて候よ
帝國萬歲、萬萬歲
ああら目出度ふ候ひける

天長節

行幸の朝を富士晴れて
秋ほがらなり青山の
観兵式は嚴に
天皇出でて見そなはす

御國を護る國津神
戰を護る軍神
のりても見ます天雲に
蹄の音の響くかな

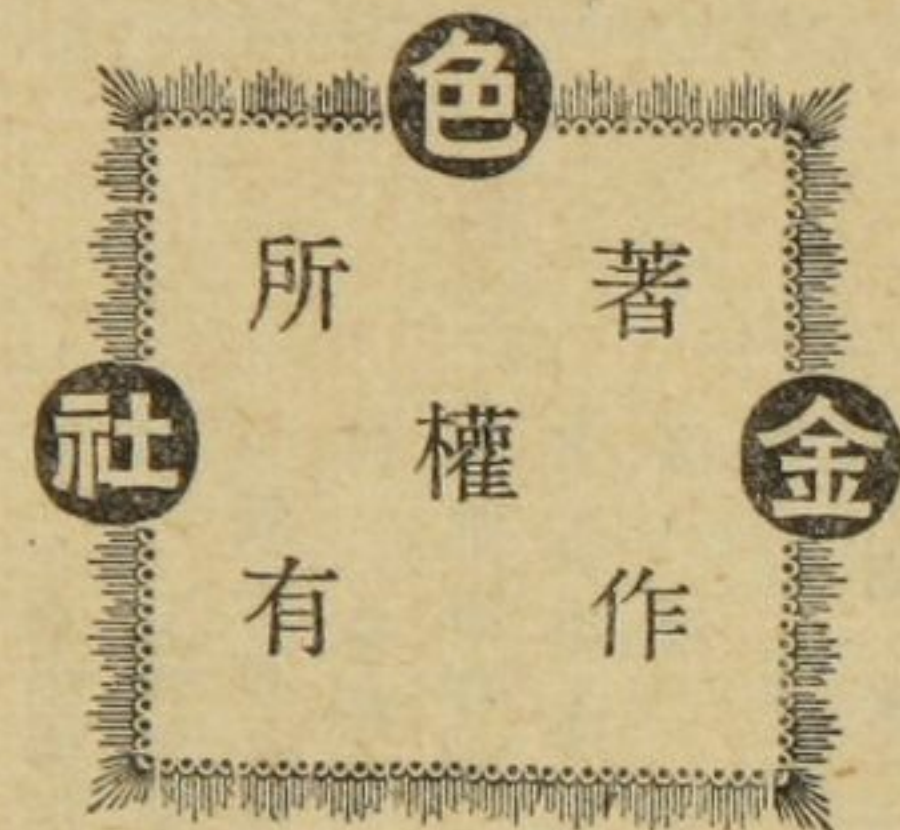
ありとし聞けど老の眼に
地圖なる文字は見えわかず
杯あげて戦場の
兒等が上をば只祈れ

櫻落葉に、柿落葉
落葉の庭をかきよせつ
焚火する兒よ、朝霜の
白菊、黄菊、捧げずや

劍影 (終)

明治三十八年三月十二日印刷
明治三十八年三月十八日發行

劍影與附
定價金拾八錢



著作者

河井 醉茗

東京市本郷區彌生町三番地

發行者

山田 肇

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

印刷者

佐久間 衡治

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

印刷所

株式會社 秀英舍

發行所

東京市本郷區
彌生町三番地

金色社

◎麗粹釘裝特獨社色金◎

◎田口掬汀君著

家庭小説 女夫波

口繪 錦木清方君畫
表紙意匠 平福百穂君案

前編 九版
後編 六版
定價各一冊六十錢
郵稅一冊八錢
小包料二冊十五錢
（クロース裝釘最本）

- 女夫波は永遠の力として愛の發展を描きたる高尚純潔の家庭小説にして其女主人公は意思強き明治新婦人の好模型なり
- 女夫波は其讀者中一度び互に冷却せし夫妻間の舊情温を回復倍加して一家團樂の破綻を救濟せし實績を有せり
- 女夫波は互に好配偶を得て愉快なる家庭を造るべき活ける教訓書たると同時に詩趣横溢の中生活の眞意義を照耀す
- 女夫波は一家團樂の席に縊きて趣味と感化とを及すべき家庭向き作物として一般批評家の公認を得たる明治文壇の光彩なり

特約大賣捌所

東京市神田區表神保町三番地
 同 神田區裏神保町一番地
 同 京橋區尾張町二丁目
 同 京橋區鎗屋町十三番地
 大阪市東區備後町四丁目
 同 東區南本町座摩筋
 京都市寺町通二條南入
 名古屋市本町三丁目
 金澤市片町
 熊本市新町貳丁目
 久留米市米屋町
 信濃市長野市
 信濃上諏訪町

東京 京屋堂
 上野 隆堂
 東海 隆堂
 北岡 隆堂
 吉岡 隆堂
 杉本 隆堂
 若林 隆堂
 川瀨 隆堂
 宇都宮 隆堂
 長崎 隆堂
 菊竹 隆堂
 西澤 隆堂
 宮阪 隆堂

◎麗粹釘裝特獨社色金◎

◎伊藤銀月君著

口繪 小川芋錢君畫
表紙意匠 平福百穂君案

小説町の仙女

好評第參版

クローリス裝 全一冊 最美金
定價 六十五錢
郵税 八錢

●町の仙女は明治文壇の奇才伊藤銀月先生が後にも先きにもタツタ一度
び試みたる新作小説なり小説的叙事詩の最も上乘なるものなり

●町の仙女は或有福町人のダダッ兒より一轉して市上の女優となり山中の
針女となり大學生のラバアとなり哲學者の妻となり海賊船の女
王となる一怪美人を捕へて其が運命の流轉をば縦横に描けり

●町の仙女は銀月式美文の特徴最も能く現はれ構想は靈妙挿話は奇峭印象
は透徹文辭は痛勁熱烈真に一世に冠絶して千歳に濶歩すべき也

●町の仙女は江戸趣味の墮落を痛嘆し平凡靜止をば罪惡の如く痛罵せる天
才の叫びなり所謂熱時人を寒殺し寒時人を熱殺せずんばやます
嚼みしむれば嚼みしむる程味の出る銀月式美文中の最長編也

◎麗粹釘裝特獨社色金◎

◎坂井久良岐先生著

表紙畫 圖案俱樂部案
口繪 坂井紅兒君畫

クローリス裝釘最美金實價五拾錢郵税六錢

▲家庭の間に諷詠すべく改良されし新川柳集

▲現代の人情思潮を正直に反映する新川柳集

滑稽文學 川柳久良岐點

(附) 川柳慨言
川柳講壇

(版再)

▲科學的研究口語式 馭洒落 當近みクスグリの三邪を叱斥して
可笑味 輕味 穿ち の三美を鼓舞せり

▲江戸前の新風味 附錄二雄篇能く川柳の解法作意を説明して
懇篤に全編五百頁危然たる無前の珍書なり

▲川柳道の新光明

◎ 麗粹釘裝特獨社色金 ◎

田口掬汀君著
平福百穂君畫

好評參版出來

說小新生涯

紙數菊判三百頁
洋裝美本
定價五十八錢
郵稅八錢

『新生涯』は堅固なる理性を保ちて世の迫害に抗して進む青年と薄倖の佳人との間に蟠れる奇しき運命を寫した長篇小説である……情が勝つか、理性が勝つか……人間生存に最も必要なる此疑問に答へるのが『新生涯』の主眼である。
著者の前著『女夫波』によりて靄然たる温味を食ぼりたる讀者は、更に此篇に就いて可憐の野花が暴き風雨に揉まるるさまをも見給へ。
着想奇抜、文情凄艶、明治時代を横流する人情の活殺は納めて此一巻中にあり。

◎ 麗粹釘裝特獨社色金 ◎

英國 ジョン ラボック 先生原著
日本 正岡 藝陽 先生譯述

說明圖及參考圖
五十餘個挿入

自然美論

新刊發賣
クローヌス裝釘最美本
定價八拾五錢
郵稅拾錢

- 自然美論は自然と人生との感通をば最も明確に理解せしめて自然と共に樂む可く極めて趣味多き研究方法を教へ、文學、哲學、科學の調和を最も完全に示せり。
- 自然美論は花にも星にも自然の意義あり不朽の生命あるを説明せり、聖書に所謂蜜と乳とに溢るゝ樂土を説明せり。
- 自然美論は先づ美と幸福論とに着筆し、自然の愛、動物の社交、植物の活動、花界の歴史、山河湖谷の根元儀容爭鬪妖術より、延ては海岸論となり、兩極觀となり、最後に燦爛たる天空を精叙して星雲の飛動に筆を擱けり。
- 自然美論は天地萬象に關する科學的智識と、美的觀察力とを併せ與へ、趣味は豊溢、利益は無限、讀む者驚喜措く能はざる可し。

むらさき

與謝野鐵幹君著

珍奇表裝美本

今や國詩革新の潮流頗る急なるに當り、江湖の才人乞ふ本書に依つて更に發明せらるゝあらば幸也
『むらさき』一篇鐵幹氏が長短數十の作詩を收めたり加ふるに奇抜なる製本の体裁まづ人目を一新せしむ
三版成れり希くは一讀を玉へ
(金三十五錢郵稅四錢)

大坂市東區南區西側 杉本書店 發賣元

與謝野晶子女史著 藤島武二君畫

小扇
みだれ髪

極美本 金三十五錢 郵稅四錢
極美本 金三十五錢 郵稅四錢

落想に聲調に變幻百出して、獨創の妙才優に一生涯を開き、之に盛るに紅恨紫怨纏綿悽愴の情熱を以てするは我晶子女史の歌にあらすや曩に『みだれ髪』の著あり、洛陽の男兒、才子に驚いて顔色無からんとせしもの、今又此新作『小扇』を得て如何の感ありしぞ、『みだれ髪』は三版成りて市に盡きんとし、『小扇』市に絶ふるも半歳にして漸く再版成りて市に盡きや、世末には上田學士其他の『みだれ髪』の細評を附録とせり、希くは此鬼才の女史が濃婉の歌調に耽り玉へ

兒玉花外君著

花外詩集

金三十錢 郵稅四錢
兒玉花外氏は社會主義詩集を公にし、會したるに天下の文士五十有餘家、これに書む寄せて之れを慰む涙多き日者筆を執ると三日に詩忽ち二十有餘作、名づけて『花外詩集』と題す、即ち是集と題するに、餘贈くられたる五、餘家の詩文を以て、す熱情の詩を配して、熱誠の詩を以て、凡ならず、情の篤き、見らざる、初版に、成る希くは再版を、惜しむ玉へ、願

歌山上湖上

島崎藤村先生序歌 太田みづほのや君合作
伊藤左千夫先生序歌 久保田山百合君

小川芋錢君畫山上湖上題繪葉書挿入

山上湖上は信山雲青く湖白き邊より噴湧せる清韻なり天來の響なり
山上湖上は其調首々純朴雅健高秀且つ田園趣味に豊富なり
山上湖上は山上自然の聲調なり湖上自然の聲調なり彼偽構術色自から詐る者と同日の觀にあらず
みづほのや君は筑摩川の畔にあり悠々自適徐ろに自然の寶藏を探ぐる
山百合君は諏訪湖の畔にあり悠々自適徐ろに自然の寶藏を探ぐる
山上湖上は明治清新派の代表歌なり總ての同類より一頭地を抽でたる明治清新派の代表歌なり

洋裝最美本
實價貳拾五錢
郵稅六錢

菊池幽芳君著

七日間

各金四十錢 郵稅各四錢

—(冊二下上)—

本書は露西亞の皇室の内外に起これる尤も慘憺たる小説にして最も美にして最大膽なる最も狡猾にして最も機敏なる絶世の一佳人あり六尺有餘の皇帝の親任厚き大政治家が一炊一飴せられつゝ相共に生死の境を彷徨す讀むもの心膽を寒ふせずんば止まず讀者を激せしめ其最後まで了せずんば安んずる能ざらしむるもの蓋し本篇の如きは無からん

中村春雨君著

無花果

(錢八稅郵 錢五十四金)

往年大阪毎日新聞が金五百圓の懸賞小説を募集したる際坪内博士、幸田露伴、故尾崎紅葉三先生の審査に依り第一等に當選したるは即ち春雨氏の無花果にして當時の文壇を騒がし世人無花果を手にし、エミヤ夫人を口にせざるものなかりき、爾來幾歳、版を重ねると九度、發賣部數幾萬たるを不知、實に明治小説界の異彩なりとす、久しく版絶へて江湖の需に應ずるも不能りしに漸く釘裝善美を極めて第九版は成れり、夫れ無花果は在來の陳腐なる舊套を脱して材を宗教に執り、信仰と人情の衝突、家庭と社會の撞着より生ずるあらゆる悲劇が眞厚珠の如き女主人公の温情と及び希望と良心の復活とに依りて遂に和氣飄々たる樂天地となりゆく光明小説にして同時に家庭に於ける良好なる讀みもの也、世の子弟も讀むべく教育家も共に熟讀を價するものなり

中村春雨君著

雛鳩

金四十五錢 郵稅八錢

—(次目)—

子蘭盆會。吾林。雜り種。片男浪。追羽子。けふ一日。もつれ糸。雛祭。白妙塚。娘氣質。癡村落。繪畫哲學。ちぎれ文。天神橋。自然詩人。尼のゆくへ。つゞれの錦。浮沈。わが罪。二本松城。鐵道馬車。妹山。鑛脈。月の船歌。病犬。以上廿有餘の短篇小説を收む皆是れ小なりと雖もダイヤモンドの如き貴きもののみ

薄田泣菫君著

暮笛集

赤松麟作君畫

全紙二重摺頗美本
コロタイプ 金四十錢
版色刷二葉 郵稅四錢

熱情の詩人薄田泣菫君は備中の人也、氏の詩、詩韻幽沈にして天下の尤も珍とする所也、暮笛集は氏が第一の詩集にして、滿都の人士を驚かしたるもの、久しく版絶へて高需に應ずるも不能、感みとせしに、今や全篇凡て美はしき紅線の中央に刷り出され、製本巧を終へて善美第三版を公にせり、卷中「兄と妹」「尼が紅」の兩篇に題したる赤松麟作氏がコロタイプ刷の彩畫又逸品にして、就中尼が紅は百有餘節の長詩一箇篇に、戀にやつれし尼が其男を慕ひゆく果敢なき人生夢路を歌ひたるもの亦誰人か涙無からんや、其他幾十の長短の作詩皆氏が獨特の經營苦心の傑出のもののみを蒐めたり、あはれ天下の士一讀を惜しみ玉ふ勿れ

薄田泣菫君著

滿谷國四郎君畫

行く春

全紙二重摺頗美本
コロタイプ 金四十錢
版色刷四葉 郵稅四錢

世の事物の日を経れば陳くなりゆくが中に詩歌のみは常に新らしく美はしく幸福なるは詩集を携ふる人の身の上のことと思はる、也、薄田泣菫君が第二詩集を『ゆく春』といふ、第四版市に絶へて半歳天下の才人之を感むと甚し、即ち第五版は松尾素洲氏の新意匠に成る餘幅を色刷に其中央に刷り出されたるは著者が熱血のこぼれ出て、詩を作したるもの實に五十餘篇の多きに上り満谷國四郎氏の彩畫に成れるコロタイプ版四葉はとりくに詩趣幽かに麗はし見ては眼に美はしく満谷國四郎氏の彩畫に成れるコロタイプ版四葉はとりくに詩趣幽かに麗はし見ては眼にを立て、あはれ、涙ある人の心、此集持たぬを悲しとし玉はずや、口惜しと思はさずや書肆は勉めて此書の閣讀

發行元 大坂市東區南區西側 杉本書店

發行元 大坂市東區南區西側 杉本書店

文淵堂藏版河井醉茗詩集

河井醉茗君著
三宅克巳君畫
長原止水君畫

コロタイプ色刷口繪釘裝美麗

詩塔

影

全一冊

金三拾五錢

郵稅四錢

醉茗河井氏が詩は清新の調掬すべく幽恨の情味ふべし、夙に一家を作すもの宜なりと謂ふべし。所謂文庫派の元帥也。氏が無弦弓以來の作を蒐めて一卷を作す曰く塔影之れ也。卷頭飾るに三宅克巳氏が畫に加ふるに長原止水氏が意匠の釘裝に成れり。劍影に氏が戰爭を歌ふの聲を聞き玉ふの士は亦著者が花鳥風月を歌ふを聞き玉へよ、著者序して曰く神は田舎を造り、人は都會を造る。吾は田園に生れて、都に移れり。幼くして詩を作すに苦惱なく、後僅の書を読んで筆を行るに忽ち澁滯す。今第二の詩集を編むに當りて糊塗の痕の多きに驚くあり吾惑へる哉と温厚にして眞率なる著者が面目の表はれて懐しからずや

發賣元 大坐 坂摩 市前 東通 區南 南入 本西 町側 杉本書店

